

<論文>

シルバー・バーデット社音楽教科書指導書『Music』における指導内容と方法の考察

—— 「生成の原理」を観点として ——

溝口 希久生

和歌山信愛大学 教育学部 子ども教育学科
e-mai:mizoguchi@shinai-u.ac.jp

《要旨》

本研究の目的は、シルバー・バーデット社音楽科教科書指導書『Music』（1985年）の指導内容と方法を、生成の原理の観点から考察する。そのことによって、日本における学校教育の音楽科学習への示唆を得ることである。

結果、形式的側面が重視され、生成の原理で位置づけられている内容的側面は捨象されている。教師主導の学習から成立し、形式的側面の構成要素を重点的に教えていこうとする。単元は、形式的側面の一つの構成要素を設定し、その下位の要素を1時間の授業ごとに教師の指示により効率的に学ばせようとするものである。

今後の日本における音楽科学習において次のような示唆を得た。音楽科の指導内容の4側面を学習に位置づけ、相互に関連させる授業を構成する。それを、子どもが能動的に音楽に関わり、友達と課題を解決していく方法で実践を工夫できる教師が求められる。

I 研究の目的と背景

1 目的

本研究の目的は、アメリカのシルバー・バーデット社の音楽科教科書指導書『Music』（1985年版）（Crook,E,Reimer,B,Walker,D,D, 1985）¹⁾の指導内容がどのように捉えられ、子どもにそれをどのように学ばせていくことが意図されているのかを生成の原理を観点にして明らかにする。そのことによって、日本における学校教育の音楽科学習への示唆を得ることである。

「学習指導要領等の改善」答申（平成28年12月）で「主体的・対話的で深い学び」が示され、「子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けたりすることができ

るようにするため、子供たちが『どのように学ぶか』という学びの質を重視した改善を図っていくこと」が目的とされる²⁾。この「主体的・対話的で深い学び」は「これからの時代に求められる資質・能力」に対応するための教育方法として位置付けられている。学習指導要領改訂の方向性が「何ができるようになるか」、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」という3つの柱で示された³⁾ように、今まで以上に教科の指導内容と授業の方法を検討していくことが重要になっているといえる。しかし、現状として音楽科の授業で学校現場の指導者は、指導内容や方法を明確に意識しながら授業を行っているとは言い難い。

一方、教員養成大学においては、音楽科の教科内容と実技を分離して教育しているという課題が指摘されている⁴⁾。

アメリカの公教育を振り返ると、教育への危機感から公教育の改革が本格化した1980年代に各州が全力で子どもたちの学力育成のための様々な試みが行われた⁵⁾。それにもかかわらず、十分な成果をあげるまでには至っていない⁶⁾。この時代、音楽科はどのような授業を目指していたのか関心をもっていただことが本研究の動機である。

そこで、具体的な実践に導いているアメリカの音楽科教科書でシェアの高いシルバーバーデット社の教科指導書を分析対象とした⁷⁾。それを、〔共通事項〕が初めて設けられ、知覚・感受を中核にする内容となった平成20年学習指導要領・音楽科⁸⁾に影響を与えた生成の原理を観点として検討していく⁹⁾。

湯浅は、日本の教育改革の多くがアメリカの教育制度をモデルとしてきた歴史的経緯を有するという¹⁰⁾。特に1980年代のアメリカの音楽科教科書の指導内容と方法を反省的に考察することは、今後の日本の音楽科学習をデザインする際の知見となりうると考える。

2 背景と音楽科カリキュラムの検討

ここでは、1957年のスプートニクショック以降のアメリカの教育改革の特徴を簡単に概観し、『Music』（1985年版）が出版された当時の背景を考察する。次に、『Music』を教育思想の観点から考察し、教科書がどのようなカリキュラムに位置づけられるのか明らかにする。以上2点から『Music』の1985年版を分析対象とするのかを述べる。

(1) アメリカの教育改革

1957年のソビエトの「スプートニク」の打ち上げに成功したことによるアメリカの衝撃と危機感は大きかった。この出来事を契機にアメリカの公教育は、教育体制を見直し、1958年「国家防衛教育法」の成立によって理科、数学、外国語教育の振興を重視した¹¹⁾改革を行った。

しかしその後、アメリカは学力低下や学校荒廃といった学校教育の危機がみられる。それは、公教育において過度の多様化を実現しようと、学習者個人の教育的ニーズや興味・関心を強調したが、英語や数学、理科、社会などの教

科の軽視によって引き起こされたことが大きな要因にあった¹²⁾。この状況のなか1983年に発表した報告書「危機に立つ国家」(A Nation at Risk: The Imperative for Educational Reform)¹³⁾によって教育が直面する危機的状況を国民に訴えたことは、全米に大きな衝撃を与えた。同報告書は、アメリカ人の教育レベルが伸び悩んでいると分析し、アメリカ社会に「汎庸性の増長 (“a rising tide of mediocrity”）」がみられると警告した。この調査結果は、アメリカ人の教育システムに対する自尊心を大きく傷つけるものであったが、全米に喧伝されると、全米各州で公教育を見直す動きが本格化することになる¹⁴⁾。

上述のように、1983年以降、全米各州で学力低下の克服ために公教育の見直しが本格化し、カリキュラムの改善が今まで以上に推進されていったといえる。それに伴い音楽科も新たなカリキュラムの基で新しい教科書が出版された。すなわち、20世紀のアメリカの教育改革を振り返ると、1983年以降が教育改革の大きな転換期にあたり、全米各州で学力育成に全力で取り組み出した時期にあたるということがができる。

(2) 教育思想の観点からみた音楽科カリキュラムの検討

それでは、この時代の『Music』は、教育思想の観点から音楽科カリキュラムをみると、どのようなカリキュラムに位置づけられるのであろうか。

西園は、教育思想の観点から音楽科カリキュラムを類型化し特徴を明らかにしている。代表的なものは、本質主義教育思想と進歩主義教育思想¹⁵⁾に分類されたとした。西園は、本質主義教育思想を背景にもつ音楽科カリキュラムは、演奏中心の音楽科カリキュラムと概念中心の音楽科カリキュラム、の2つに分けられるという。演奏中心のカリキュラムは音楽を楽しんだり読譜や演奏上の技能を発達させたりするものである。一方の概念中心の音楽科カリキュラムは、音楽を音楽概念という形で生徒に習得させることによって音楽を理解させ、音楽文化を次の世代に伝達・伝承していくことを目的とす

る。演奏中心の音楽科カリキュラムでは音楽はわかるようにはならないという反省から概念中心の音楽科カリキュラムは生まれている¹⁶⁾。このカリキュラムは、アイデアリズムないしリアリズムを基礎哲学にもち、伝統的な文化遺産の本質を教育によって理解させ継承していくことを特色とする¹⁷⁾。

一方の進歩主義教育思想を背景にもつ哲学は、プラグマティズムで、この教育思想は本質主義教育思想のような伝統的文化の保持による社会の現状維持ではなく、社会の漸進的進歩を期待するところに特色がある。カリキュラムは、社会遺産の系統的変遷ではなく、生徒の様々な日常経験を内容とし、生徒に現実の問題を解決させることによって問題解決力を育成することを第一義的目的とする¹⁸⁾。

アメリカでは、60年代から70年代にかけて、楽器や歌唱の演奏による技能の習得を目指した演奏中心の音楽科カリキュラムによる教育から音楽の概念を理解させる概念中心の音楽科カリキュラムに移行してきた。西園は、シルバー・バーデット社の音楽科教科書『Music』(1974-1985)は、概念中心の音楽科カリキュラムによる教科書として位置づけられるとした¹⁹⁾。また、アメリカの音楽教育学者ベネット・リーマが編集に携わり、彼の音楽教育の哲学が理論的基礎にあることも関連しているといえる。

以上から『Music』(1985版)は、教育思想の観点から音楽科カリキュラムをみても転換期にあたる教科書といえる。節目ともいえるこの時期の教科書を反省的に考察することで、日本の音楽科学習の知見としたい。

3 先行研究の検討

アメリカの教育改革の後の音楽科教科書『Music』に関する先行研究を検討する。小島は、『Music』(1978年版)の分析によってカリキュラムが学年を通してスパイラル方式で構成され、連続性と発展性にあるとした²⁰⁾。この研究は、『Music』教科書の学習の方法を明らかにし、子どもの音楽学習における意義を導出したものである。しかし、教科書の指導内容を分析・検討したものではない。

尾見は、『Music』(1974・1978年版)を取り上げ、美的教育としての音楽教育の目標・内容・方法とカリキュラムの全容を明らかにしている。しかし、具体的に単元構成や学習過程等の検討はなされていない²¹⁾。

西園は、『Music』(1985年版)を取り上げ、カリキュラム構成と単元構成の特徴を明らかにした²¹⁾。この研究は、1学年1単元のみを単元構成の観点から分析したものである。指導内容をどのように学ばせていくのか、生成の原理の観点から分析・考察したものではない。

本研究では、アメリカのシルバー・バーデット社の音楽科教科書『Music』(1985年版)において、指導内容をどう捉えて、どのように指導内容を学ばせていたのかという方法を生成の原理の観点から検討しようとする点が先行研究と異なる。

以上、第2節で検討したように、『Music』教科書(1985年版)を分析対象とした理由は、①1983年以降、教育改革の大きな転換期にあたり、全米各州で学力育成に全力をあげて取り組み出した時期である、②教育思想から音楽科カリキュラムをみたとき、演奏中心の音楽科カリキュラムから概念中心の音楽科カリキュラムによる教育への転換期に出版された教科書である、という2点にある。

II 研究の方法と生成の原理

ここでは、まず本研究の方法を述べる。次に、生成の原理とは何かを述べる。

1 研究の方法

先述した理由により、『MUSIC』教科書指導書(1985年版)を分析対象とする。その中で、学習内容は比較的分かりやすいが、音楽的側面が低学年から分化され基本となる音楽的側面がほぼ示されている3年生を対象とする。

研究の方法は次の通りである。まず、『MUSIC』教科書指導書(1985年版)では、指導内容がどのように構成されているかを調べる。次に、第3学年を取り上げ、いくつかの単元を抽出し、1時間の授業ごとにどのような指導内容が設定され、どのように学習を展開させているのかを生成の原理を観点として分析する。それを

踏まえて、最後に日本の音楽科学習における示唆を提示する。

2 生成の原理

(1) 生成の原理

現在の音楽科教育については、西園が導き出した芸術教育の哲学である「生成の原理」によって音楽科教育の意義を論じることができる²²⁾。

教育は、あらかじめ決められた到達目標を達成することが目的ではなく、学習者が経験したことを振り返り、思考することにより、絶えず経験を再構成していくものと捉えることができる。デューイは、経験を主体である人間と環境との相互作用と捉える。すなわち、人間は、環境に働きかけることにより、環境から働き返されるという相互作用によって環境を変え、また自分自身を変えることで経験を新たにつくりかえていく²³⁾とした。

生成の原理は、西園がJ. デューイの芸術的経験論から導出したものである。西園によれば、「芸術的経験によって外界（環境）に作品を生成し、その過程で内界（内的世界）を生成すること。」²⁴⁾であり、「その本質は芸術的経験による学習者の内界（内的世界）と外界（環境）の二重の変化にある。（ ）は筆者が記述。」²⁵⁾とされている。

(2) 音楽の生成

では、「音楽の生成」とは何か。それは、「学習者が音楽の素材との相互作用の中で外部世界に作品を生成し、それと相関して内部世界が生成されるという構造になる。」²⁶⁾西園は、この外部世界（環境）である音楽表現と学習者である人間との相互作用による二重の変化が「音楽の生成」となるという。

音楽の授業では、外側に生み出される表現の出来栄だけが目的ではなく、その過程でイメージや感情等といった学習者の内的世界もつくりかえていくようにすることが、学校の芸術教育としての音楽教育を行うことの教育的意義があるとする。

(3) 生成の原理から導出される音楽科の指導内容

生成の原理から音楽科の指導内容の4側面が

導出される。まず音楽の諸要素とその組織化によって音楽のかたちがつくられる。これは、①音楽の形式的側面、これを私たちは知覚する。次に、これら音楽の諸要素とその組織化によって「質」、すなわち音楽のなかみがつくられる。これは②音楽の内容的側面となる。これは気分・曲想・雰囲気等となり、イメージや感情を伴って感受する。

その場合の指導内容には、2つの観点があると西園は言う。一つは、例えば、音色・リズム等の個々の要素が指導内容の時は、女性の高いという客観的側面を知覚し、その声の音色のつややかな感じという質的側面を感受する場合と、あと一つは、例えば、音色・リズム等が組織化されたものを知覚し、その組織化されたものを高揚する感じ・うきうきする感じと感受する場合がある²⁷⁾。

そして、これら音楽の形式的側面と内容的側面はある人々の思想や感性によって創造され、そこにはその人々が育った風土・文化・歴史といった「背景」がある。これは、③文化的側面となる。さらに音楽の形式的側面と内容的側面と文化的側面からなる音楽を具体的に表現として形づくるには、表現の技能が求められ、これは、④音楽の技能的側面となる²⁸⁾。

以上の指導内容の4側面は、実際には一体となっており、分析的に捉えるとき区別される。

III 教科書の指導内容

『Music』教科書指導書の指導内容がどのように位置づけられているのかを第3学年を取り上げ明らかにする。次に、いくつかの単元を抽出し、指導内容がどのように捉えられ、どのように学ばせていくのか分析し、生成の原理の観点から考察する。

1 指導内容の分析

分析対象とした『Music』の1985年版は、1974年に初版が発行され1985年が最終改訂である。1988年から、シルバー・バーデット社は、『World of Music』という名で新たな教科書が刊行されている。

教科書は、幼稚園から第8学年までであり、どの学年も25個くらいの単元（unit）から成る。

単元は、1～15個の「レッスン」(lesson)から構成され、そこでは基礎計画(Basic Plan)と発展的計画(Extending the Plan)に分かれている。(表1参照)

カリキュラムのスコープ(範囲)は、①「音(sound)の表現的特質」②「諸芸術(The Arts)」③「音楽様式(Music Style)」④「職業(Career)」の4つの柱から構成されている。①「音(sound)の表現的特質」は、音楽の構成要素(テンポ、メロディ、拍子、ダイナミクス、形式、音色等)とそれらの下位要素から成る。②「諸芸術」は、音楽芸術の特質を捉えるものである。③「音楽様式」は、クラシック、現代音楽、ポピュラー音楽、民族音楽、ジャズ音楽と多様な音楽の様式を理解させる。④「職業」は、音楽に関わる仕事を理解させる。実際に、②「諸芸術」と③「音楽様式」は、「音の表現的特質」を中核として関連づけて学習するようになっている。

シーケンス(発展性)は、①「音(sound)の表現的特質」が、らせん型に編成されている。例えば、「リズム」の下位概念「リズムパターン」という音楽概念を、1年生から5年生まで継続して学習するようになっている。学年が進むにつれ、「音楽概念」の内容は、スパイラルな構造になっている。

単元は、大半が、柱の①「音(sound)の表現的特質」の音楽の構成要素とそれらの下位要素の一つを単元名にしている。②「諸芸術」は、「芸術」という単元が各学年に3つ程ある。③「音楽様式」は、「様式」「私たちの国を歌おう」といった単元が各学年に5つ程ある。④「職業」は、作曲家といった音楽に関わる職業を扱う単元が各学年に1つある。

以上のように、音楽の構成要素(テンポ、メロディ、拍子、ダイナミクス、形式、音色等)とその下位要素という形式的側面が中核にあたり、それと関連づけて、「諸芸術」、「音楽様式」、「職業」という文化的側面を学ぶように構成されている。

次節では、第3学年の教科書から単元を抽出し、基礎計画では、子どもにどのように学ばせるのか、単元の意図している考え方を分析し、

単元	レッスン
単元1 テンポ	1～6
単元2 メロディ	1～7
単元3 作曲家	1
単元4 拍子	1～9
単元5 ダイナミクス	1～10
単元6 様式	1
単元7 形式	1～8
単元8 芸術	1
単元9 音域	6
単元10 様式	1
単元11 時間	9
・ ・ ・	
単元22 芸術	1
単元23 テクスチャ	1～11
単元24 様式	1.2
単元25 私たちの国を歌おう	1～15

表1 第3学年のカリキュラム構成の枠組み

さらに生成の原理を観点として考察する。

2 単元の分析

(1) 単元1 Temp

① 学習の展開

Lesson1 [速いテンポ、遅いテンポ]

馬が走っている教科書の写真を見て、速いか遅いか考えさせる。次に、1週の曜日の名前や1年の月の名前、かけ算九九などを速いテンポと遅いテンポで繰り返して言わせることで、テンポの概念を導く。次に、楽曲「なんと美しい町よ」のAとBの解釈をしたレコードを聴かせ、テンポを尋ねる。最後に、この歌を練習して歌わせる。

Lesson2 [テンポ、徐々に速く]

「ヘイ ホー ヘイ ロー」を聴かせ、次第に速くなっているところを発見させる。次に、拍が速くなることを感じ取らせるために、レコードの歌に合わせてタンバリンで拍を刻ませる。

Lesson3 [テンポの変化、拍が徐々に速く、拍が徐々に遅く]

「リンゴの木の上の風」を聴かせ、テンポについて尋ねる。次に、次第に速くなっているこ

とに気付かせるために、レコードを聴きながら拍を軽く手で打たせる。最後に、レコードの演奏でテンポが変わったところを尋ねる。

Lesson4〔しっかりした拍、テンポの保持（フェルマータ）、テンポの変化〕

歌詞を読ませて、その中に出てくるメニューとは何か探させる。次に、音楽が止まったり保持したりした時の記号がフェルマータであることを知らせる。子どもたちが歌をよく知っていたら、タンバリンで拍を刻ませる。そして、拍が止まったり保持したりした時、フェルマータでタンバリンを振らせる。

Lesson5〔しっかりした拍、テンポの保持（フェルマータ）〕

鳥の曲を聴く前に、曲や詩について話し合わせる。次に、曲を聴いて、拍が止まり保持されたところを発見させ、その記号に気付かせる。最後に、フェルマータの部分はタンバリンを振らせる。

② 単元の考え方

この単元では、テンポという概念を修得するために、テンポの下位要素である「速いテンポ、遅いテンポ」「徐々に速く」「拍が徐々に速く、拍が徐々に遅く」「テンポの保持（フェルマータ）」と1時間ごとの指導内容が設定されている。ここでは、選択された楽曲のレコードを聴いて、手拍子やタンバリン等で拍を刻む活動を取り入れることで、順次、テンポに関する構成要素やその下位要素を修得させていく学習方法が取られている。フェルマータの学習は、それぞれの楽曲を聴いて、その部分に気付かせ、歌や打楽器を演奏して音楽記号と一致させる学習活動となっている。すなわち、この単元の指導内容は、テンポという構成要素とその下位要素といえるが、それらを単元を通して1時間ごとに設定し、楽曲の聴取を中心にした活動を通して修得させるといえるものである。

以上、生成の原理の観点から単元1を考察すると、単元を通して、教師主導で学習活動が導かれている。教師が速い曲を流すと、子どもは拍を知覚し、手拍子やタンバリン等で拍を速く刻み、外的世界に音楽を形づくる。しかし、例えば、「リンゴの木の上の風」が次第に速度が

速くなったことに伴い、風が強く吹いてきた感じがするといった曲のイメージや感情等を読み取る活動の場は見あたらない。また、フェルマータの学習では、フェルマータにより拍が保持されることによって、曲の終止部分が余韻を残すことで、子どもの内的世界も変わることを考えさせる場はない。そのため、音楽の変化に伴い、音楽に働きかけて、表現を工夫する活動を行うことは期待できない。

一方、楽曲を聴取する活動が多く取り入れられているが、一つの楽曲には一つの構成要素や表現要素だけに着目させ、それは1時間だけの学習である。楽曲の構成要素や表現要素を相互に関連させて知覚・感受を促し、一つの曲を全体で通して表現したり鑑賞したりする活動とはなっていない。また、これらの活動は、学習者個人で活動するもので、他者とかわりながら音楽を探究していく場は想定されていない。

(2) 単元2 Melody

① 学習の展開

Lesson1（メロディの方向、上行形、下行形、五線譜）

教科書の指示に従ってゲームをさせる。次に、電子音の1と2のレコードを聴いて、教科書の初めの2つの五線譜にある矢印に注目させる。さらに、電子音の2つの曲を聴いて、矢印をなぞらせる。次の2つの五線譜に注目させ、電子音のレコードを聴いて、どちらに似ているか尋ねる。最後に、「かわいい小さい馬たち」のレコードを聴いて、それぞれのフレーズの最後がどのような音の動きになっているのか尋ねる。

Lesson2（上行形、下行形、反復）

教科書を開かせ、レコードを聴く時、歌詞に注意して聴くように促す。そして、「クローバーはどこに咲くか?」「どの季節に咲くか?」「どんなにおいがするのか?」といった質問をする。

次に、教科書の楽曲のリズムパターンに注目させ、それが下行に動くことを発見させる。そして、ベルを交代で演奏させた後、レコードを聴いてその歌に従わせる。最後に、ベルを交代で演奏する練習をさせた後、レコードを聴いて

歌に合わせて交代で演奏させるようにする。

Lesson3 (下行形、メロディパターン、反復)

歌の歌詞を教師が読んだり子どもに読ませたりして歌詞の内容を「歌詞について友達が老婆に話していたような言葉で話すことができるか?」「どこがソフトでどこが乱暴か?」「最も乱暴なところはどこか?」というように尋ねる。次に、レコードを聴いて、「オーオーオーオー」と歌うところを交代で歌わせる。

次に、教科書のメロディパターンに注目を向けさせる。そして、「このパターンは、上行形ですか、下行形ですか?」と質問する。

最後に、メロディパターンが「オーオーオーオー」と2回繰り返されることを見つけてまとめる。

Lesson4 (メロディの方向、フレーズ)

1と2と3のフレーズの最後の「Train」の音に着目して、レコードを聴かせる。そこでは、子ども達の声が繰り返されているのを聴くことができる。

次に、フレーズの最後に歌うもう一つの「Train」の音について考えさせたり、歌の代わりに打楽器で演奏させたりする。さらに、その歌を学んで、レコードを聴きながら、教科書の楽譜の表記を見て、カラーボックスのフレーズと同じ別のフレーズを見つけさせる。

Lesson5 (上行形、下行形、反復)

教科書の8つの歌の上行形、下行形に注目させ、それぞれの音形の下に書いてある歌詞を読ませる。8つの曲から1つ選ばせて、どのように手を動かすかしたらよいか示させる。

次に、8つのメロディパターンの方向を分析させて、1つ曲を選んでベルや鍵盤打楽器で演奏させる。

② 単元の考え方

本単元は、まず、レコードを聴いて五線譜の矢印をなぞらせることで、上行形や下行形の概念を理解させることから始める。その後、もう1つの曲を聴いて、上行形や下行形を確認する学習が取り入れられている。Lesson2は、下行形のメロディパターンを歌と一緒にベルで練習し、演奏させることで、下行形について理解を深める活動となっている。歌詞についての質問

は表面的である。Lesson3では、歌詞の意味を考えさせ、レコードと一緒に下行形を歌う活動によって下行形の概念を修得させることが意図されている。Lesson4では、上行形や下行形を楽譜からも読み取らせたり、Lesson5では、それを演奏させるような学習となっている。

このように、本単元では、上行形や下行形に着目してレコードを聴きながら歌ったり打楽器で演奏させたりすることで、あくまでもメロディという構成要素と下位要素の概念を修得することを目的とした単元といえる。掲載された楽曲は、構成要素を修得させるための教材であり、その中で行われる表現活動は、教師が主体となって活動を行わせるという印象を受ける。

生成の原理の観点からみると、この単元はメロディという構成要素の下位要素の上行形や下行形の旋律を知覚させていく活動が主となっている。例えば、レコードを1曲聴いて、下行形という構成要素を見つけて歌ったり楽器で演奏させたりしているが、下行形を知覚・感受して生じた雰囲気によって、さらに音楽に働きかけて他者とかがわりながら表現を新たに生成していくという子どもの探究的な活動を促してはいない。

(3) 単元 20 Style

① 学習の展開

Lesson1 (現代の様式)

祖父母が子どものとき知らなかった毎日の新しい暮らしについて考えさせる。例えば、ジェット機、冷凍食品、コンピューターなどを出させて討論させる。これらはすべて現代のもので、現在、生活の一部になっていることを示させる。その後、4つの現代の音楽(カントリーミュージック、電子音楽、サウンドパターン等の作曲家の作品)の抜粋したレコードを聴かせて、それらの音楽についていくつかの質問をして考えさせる。

② 単元の考え方

本単元の「様式」は、1時間で現代音楽に触れる内容になっている。まず、音楽以外の毎日の生活の中で身近な道具や電気製品等、新しくなったことを発言させて、そこから現代の様式という概念を理解させている。次に、4つの現

代音楽をレコードで紹介し、聴いた感想を述べる。カラー写真でそれぞれ演奏が掲載され、視覚的にも多様な音楽であることがイメージしやすい。この単元は、現代音楽を鑑賞の活動として位置づけられている。現代音楽を新しい音楽の一つとして取り扱い、理解させようとする点に、新たな内容が見出せる。

生成の原理の観点からみると、新しい製品や食べ物を導入で提示した後、4つの現代音楽を聴いた感想を求めるものである。現代音楽の特徴的な形式的側面を取り扱う訳ではなく、また、楽曲から生み出された内容的側面を感受し検討していく活動もみられない。現代音楽という新しい音楽の形式をイメージや感情を伴って知覚・感受し、音楽の内的世界と結び付けて探究していく学習とはいえない。

IV 結論

1 分析結果の検討

分析結果から、教科書の指導内容は、①「音 (sound) の表現的特質」②「諸芸術 (The Arts)」③「音楽様式 (Music Style)」④「職業 (Career)」の4つの柱から構成されていた。①「音 (sound) の表現的特質」は、音楽の構成要素とそれらの下位要素から成り、指導内容の大半を占めている。その他、②「諸芸術」と③「音楽様式」と④「職業」という内容が単元の中にいくつか位置づけられ、これらは、①「音の表現的特質」を中核にして関連づけて学習することになっている。

以上を生成の原理から導出された指導内容の4側面（音楽の形式的側面、音楽の内容的側面、音楽の技能的側面、音楽の文化的側面）から整理すると『Music』教科書は、形式的側面（①「音 (sound) の表現的特質」）と文化的側面（③「音楽様式 (Music Style)」）の2側面が指導内容に位置づけられていることに特徴がある。また、音楽だけでなく、他の芸術との関連である②「諸芸術」や④「職業」という文化的側面も扱われている。教材は、この時代に現代音楽も含めた多様な音楽を取り入れた点は目新しい。

そこでの音楽学習は、一つの単元の一つの構

成要素（形式的側面）を修得させることを意図し、1時間ごとに構成要素の下位要素を指導内容として設定していた。

それを、教師主導によって行い、学習者個人に学習は委ねられている。そして、どの教材も表現や鑑賞の対象となる音楽の構成要素を知覚し、それらの組織化によって生み出されるイメージや感情といった内的世界を生成するという学習の方法ではなかった。また、授業で自分の考えやアイデアを友だちに出し合い音楽と一緒につくっていかうとする場は設けられていなかった。言い換えれば、取り扱われる楽曲は、指導内容を修得するための道具といった役割であり、レコードを聴いたり歌や器楽演奏の活動は、構成要素などの形式的側面を修得する手段といえる。

2 結論と考察

(1) 結論

本研究の目的は、アメリカのシルバー・バーデット社の音楽科教科書指導書『Music』（1985年版）の指導内容がどのように捉えられ、子どもにそれをどのように学ばせていくことが意図されているのかを生成の原理の観点から明らかにする。そのことによって、今後の日本における学校教育の音楽科学習への示唆を得ることであった。分析の結果、『Music』の指導内容をどのように学ばせていくのかという方法は以下のようにまとめられる。

(1) 形式的側面と文化的側面の2側面が指導内容に位置づけられている。特に、形式的側面が重視され、生成の原理で位置づけられている内容的側面（イメージや感情等）は捨象されている。

(2) 教師主導の学習から成立し、形式的側面の構成要素を重点的に教えていこうとするものである。単元は、形式的側面の一つの構成要素を設定し、その下位の要素を1時間の授業ごとに教師の指示により効率的に学ばせようとしている。

(1) については、「様式」「職業」「芸術」といった単元以外は、形式的側面のみが指導内容となっている。そこでは、単元ごとに形式的側

面の構成要素が一つずつ設定され、その下位の要素が1時間の授業ごとに位置づけられている。「様式」「職業」「芸術」の単元は1～2時間扱いで、文化的側面が指導内容であった。

(2)の方法については、形式的側面から一つの構成要素を設定し、その下位の要素を単元ごとに教師が一方的に効率よく学ばせようとするものであった。指導書には具体的な発問や活動が示され、音楽(レコード)が指導過程に沿ってすべて準備されていた。指導書に従うと、教師が主体となって学習を進めていくことができる。しかし、他者と関わりながら音楽を生成していく場は示されていない。

以上の結果から今後の日本における音楽科学習において、次のような示唆を得た。

音楽科の指導内容の4側面を学習に位置づけ、相互に関連させる授業を構成する。それを、子どもが能動的に音楽に関わり、友達と音楽の課題を解決していく方法で実践を工夫できる教師が求められる。

(2) 考察と課題

『Music』指導書は、発問や指導過程に沿った発問や教材の提示が具体的で詳細に示されていたため、指導書に従えば、誰もが基準の授業を行えるようになっていた。教科書はカラーの挿絵がふんだんに掲載され、授業で使用する曲もすべてレコードに収められていたことから、当時、公教育に力を注いでいたことがわかる。しかし、指導内容が偏り、子どもの内的世界と切り離された形式的側面や技能を主とする

こと、それに加えて、教師の一方的な指導では子どもの活動のリアリティは失われ、学びが深まらないと考えられる。

1980年代のアメリカは学力育成に真剣に取り組んでいたが、音楽科においても指導内容や学習方法を誤ると音楽教育の方向性が変わることになる。そうなると学校教育における音楽科の特質や意義が見出せなくなる可能性がある。

日本の学校教育で求められている「何を学ぶか」という点では、外部世界の形式的側面と相互作用する子どもの内的世界(イメージや感情等)である内容的側面を中核に位置づけ、学年の発達や教材に応じた指導内容を検討する。そして、「どのように学ぶか」という方法に関しては、子どもが能動的に音楽に関わり、友達と音楽の課題を解決していく授業を構成し実践していくとき、音楽科で「何ができるようになるか」という資質・能力を身に付けていけると考える。

音楽科の指導内容や方法を指導者は、学校現場に入るとなかなか捉えられない面がある。教員養成課程大学で音楽科の内容構成を充実させることも重要であると考えられる。

課題は、その後のシルバー・バーデット社の音楽科教科書の指導内容と学習方法を分析し、どのように改善されていったのかを明らかにすることである。アメリカの音楽科教科書の歴史的経緯を考察することは、今後の日本の音楽科学習をデザインしていく上での知見となると考える。

【注】

- 1) Crook, E, Reimer, B, Walker, D, D (1985) *ds, Music, Teacher's Editoin*, Morristown, N.J.; Silver Burdett Company.
- 2) 中央教育審議会 (2016) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申) 補足資料(1/8)」, p.6
- 3) 中央教育審議会 (2016) 「学習指導要領の方向性(案) 資料2」, p.2
- 4) 例えば、頃安は大学の音楽科教科専門科目

を比較し、授業科目や関連性が見えず、理論的な知識と演奏に関わる技能の習得が目的になっていると報告している。頃安利秀(2009)「音楽科の教科内容構成の原理と枠組み」西園芳信・増井三夫編著『教育実践から捉える教員養成のための教科内容学研究』風間書房, p.157

- 5) 小池治 (2011) 「アメリカの教育改革とガバナンス」『横浜国際社会科学研究所』第16巻第1号, p.5
- 6) 湯藤定宗 (2008) 「アメリカ合衆国におけ

- る教育改革に関する一考察」『帝塚山学院
大学研究論集文学部』, p.91
- 7) 例えば、宮下は、カリフォルニア州のシェ
アは60%であると、本書の著者一人
David Connors カリフォルニア州立大学
ロサンゼルス校教授から自身のインタビュ
ー(2008年6月2日)で得たと述べてい
る。宮下俊也・宇野加奈子(2009)「シル
バー・バーデット『Making Music』カリ
フォルニア版の教師用指導書において《か
えるのがっしょう》はどのように扱われて
いるか」『教育実践総合センター研究紀要』
18, p.138
- 8) 平成20年告示の小学校学習指導要領・音
楽科では、「音色、リズム、速度などの音
楽を特徴付けている要素や、反復、問いと
答えなどの音楽の仕組みを聴き取り、それ
らの働きが生み出すよさや面白さ、美しさ
などを感じ取る」とある。文部科学省『小
小学校学習指導要領解説音楽科編』教育芸術
社(2008), p.6, 一方、中学校指導要領で
は「音楽を形づくっている要素や要素同士
の関連を知覚し、それらの働きが生み出す
特質や雰囲気を感じ取る」と記されてい
る。文部科学省『中学校学習指導要領解説
音楽科編』教育芸術社,(2008), p.6 こ
のように、〔共通事項〕が新たに設けられ、
知覚・感受を重視する内容となった。次の
現行平成29年告示小学校と中学校学習指
導要領でも平成20年の指導要領でも〔共
通事項〕と知覚・感受を中核にした内容を
引き継いでいる。文部科学省『小学校学習
指導要領解説音楽科編』(2018)教育芸術
社；文部科学省『中学校学習指導要領解説
音楽科編』(2018)教育芸術社
- 9) 当時の教育課程芸術専門部会委員や平成
20年中学校学習指導要領・音楽科の編集
に携わった西園は、生成の原理の考え方が
平成20年の学習指導要領・音楽科の内容
に影響を与えた(2019年3月30日)と筆
者に述べている。平成19年の芸術部会
では、西園は、例えば「音楽の諸要素やそれ
らの働きを知覚・感受することが学力の中
核となる。」等といった生成の原理の考え
方を反映した意見を「総論」「音楽」の中
で多数述べている。中央教育審議会(2007)
「教育課程部会・芸術専門部会第6回配布
資料2(芸術専門部会第1回～第4回に
おける主な意見)」文部科学省, [http://
www.mext.go.jp/b_menu/shingi/
chukyo/chukyo3/025/siryu/1212811.
htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/025/siryu/1212811.htm) (参照:2019.8.28)
- 10) 湯藤(2008)前掲書, p.89
- 11) *National Defence Education Act* (1958)
(平塚益徳監修訳(1972)『世界教育事典』
帝国地方行政学会, p.407)
- 12) 湯藤(2008)前掲書, p.92
- 13) 橋爪貞雄(1986)『危機に立つ国家—日本
教育への挑戦』黎明書房, p.26
- 14) Witte, John F. (2000) *The Market Ap-
proach to Education: An Analysis of
America's First Voucher Program..*
Princeton University Press.
- 15) 西園芳信(1993)『音楽科カリキュラムの
研究原理と展開』音楽之友社, pp.81-86
- 16) 同上書, p.97
- 17) 同上書, p.82
- 18) 同上書, pp.83-84
- 19) 同上書, p.181
- 20) 小島律子(1982)「音楽教育のスパイラル
・カリキュラムにおける連続性と発展性—
アメリカの音楽教科書指導書の分析を通し
て—」『大阪教育大学紀要第V部門』第30
巻第3号, pp.133-136
- 21) 尾見敦子(1983)「アメリカの音楽教科書
“Music” 美的教育としての音楽教育の内
容と方法」『MUSIC, A MUSIC TEXT-
BOOK』お茶の水女子大学心理・教育研
究会, pp.24-31
- 22) 西園(1993)前掲書, pp.163-211
- 23) 西園芳信(2015)「音楽科教育における指
導内容とカリキュラム」小島律子編著『音
楽科授業の理論と実践』あいり出版, p.45
- 24) J.Dewey (1916) *Democracy and Edu-
cation*, The Macmillan company, New
York, p74. (帆足理一郎訳(1963)『民

- 主義と教育—教育哲学概論—』春秋社,
p.79
- 25) 西園芳信 (2012) 「デューイ芸術論の特徴
—自然と精神の統一としての芸術的経験に
ついて—」『日本デューイ学会紀要』第 53
号, p.93
- 26) 同上論文
- 27) 西園 (2015) 前掲書, p.46
- 28) 西園 (2015) 前掲書, pp.46-47